異なるコミュニケーション行動における経験の描写と参加

大場　美和子

要　旨

本研究は、日本語非母語話者（NNS）が、種類の異なる２つのコミュニケーション行動において、ある１つのインターアクションにおける自らの経験をいかに描写し、参加を提示したかを分析し、会話教育への応用を考察した。まず、スピーチ用の作文では、自らの経験を、最初の経験時の否定的評価から後の肯定的評価へ変化したように描写し、タスクで求められた談話の構成、学習項目の表現を使用し、日本語の授業で期待される参加を果たしていた。これに対し、雑談では同じ経験を異なる観点と評価によって具体的に描写し、評価表現を巧みに使用して floor を開始させることにより、積極的な会話参加を果たしていた。つまり、NNS は、各コミュニケーション行動において期待される参加を果たしていたといる。以上から、積極的参加に加え、コミュニケーション行動によって話題の描写や参加のしかたを調整することの意識化を、会話教育で扱うことの重要性を考察した。

【キーワード】コミュニケーション行動　参加　評価表現　言語管理理論

Description of Interaction and Participation in Different Communicative Acts

OHBA Miwako

【Abstract】In this study, I analyze how a non-native speaker of Japanese describes her own experience of a particular interaction and how she displays her participation in two different Communicative Acts, apart from examining its implementation in conversation teaching. In the composition of her speech, she describes a change in her experience from what was a negative evaluation to a positive one, using a conversational structure and expressions that were part of the tasks given in the curriculum, thus participating as expected in Japanese language sessions. On the other hand, in a free talking session, she describes the same experience in detail from a different perspective and evaluative standard, opening up the conversation floor, positively, by skillfully using assessment utterances. In both Communicative Acts, it may be concluded that she succeeded in displaying her participation as expected. Apart from positive participation, these findings suggest the need for teaching a working knowledge of how to adjust the description of topics and manner of participation according to different expectations and the conditions of different Communicative Acts.

【Keywords】communicative Acts, participation, assessment utterance,
language management theory

1．研究の目的

日常生活には様々なインターアクションがあり、我々は、このインターアクションに参加し、自分自身も含めたインターアクションの参加者の言語行動を観察したり、解釈したりしている。特に日本に滞在する非母語話者（以下、NNS）の場合は、日本での様々な経験を通して、自分の国やこれまでの経験と比較したり、誰かに話したり、相談したりしながら、自らの経験について様々に解釈したり考え直したりするであろう。誰かに話してフィードバックをもらうことにより、また異なる視点を持つことも考えられる。このように、自らの経験を話題とし、あるコミュニケーション行動に参加する場合、単に経験した事実をそのまま述べるのではなく、自らの経験をどのように描写し、どのような参加を果たすかが問題となると考えられる。まず、描写については、単なる経験を事実として羅列するのではなく、その経験に対して自分がどのような意見や感想を持っているのかを合わせて伝えなければならないであろう。また、参加については、個々のコミュニケーション行動における期待や条件を考慮しなければならないであろう。コミュニケーション行動の１つである会話への参加については、筆者はこれまで共同研究において、積極的な会話参加を目指した談話レベルにおける会話教育の必要性を主張してきた（中井･大場･土井 2004、大場･中井･土井 2005 など）。これらは、あくまでも積極的な会話参加を望んでいながらもその参加を言語的・非言語的に示すことができず、会話に興味がないといった、意図しない誤解を他の参加者に与えてしまっている学習者を前提としている。常に積極的参加が望ましいと主張しているのではなく、コミュニケーション行動の期待や条件によって、参加のあり方を変化させる必要も出てくると考える。例えば、同一の経験談であっても、おもしろく大げさに話したり、一部は言わないでおいたり、別の視点から述べたりなど、様々な調整を行うこともあると考える。日本語教育の現場では、依頼、断り、謝罪など、ある目的を持った会話については、場面、参加者、負担度など様々な条件を考慮した会話練習が、教室活動において行われている。しかし、例えば雑談のように、会話自体に特別な目的のないコミュニケーション行動については、十分にとりあげられていないのではないか。ネウストプニー（1982）は、パーティーやおしゃべりなど、コミュニケーションだけの場面は、交友関係を広げるうえで重要でありながら、そのコミュニケーションのルールを共有しない NNS には参加が難しいことを指摘している。

そこで、本研究では、NNS がある１つの自らの経験を話題としながらも、期待や条件の異なるコミュニケーション行動において、どのように自らの経験を描写し、どのように参加を果たすのか、その違いを分析し、教育への応用を考察することを目的とする。

2．先行研究

NNS が自らの経験をコミュニケーション行動において話題として参加する場合、その経験に対する、経験時とコミュニケーション行動時の評価は異なる可能性があると考えられる。

そこで、経験をどのように評価するのかというインターアクションの管理については言語管理理論とインターアクション管理の研究、さらに、その評価した経験をどのように描写して参加を果たすのかについては接触場面や談話分析に関する先行研究を参考にする。

まず、インターアクションの管理に関する先行研究について触れる。ネウストプニー(1981)は、NNS は準母語話者になるまでのかなり長い期間、接触場面という母語場面とは異なる場面に参加することを強調している。よって、母語話者（以下、NS）ではなく、NNS による日本語の使用場面とそこでのコミュニケーション問題を研究し、接触場面における NNS の行動について、効果的な対策を立てることを主張している。つまり、接触場面を日本語教育の出発点と到達点とし、学習者が遭遇する接触場面を日本語教育の基盤におくことにより、学習者を中心にした日本語教育が行われることを主張している。この接触場面の研究の枠組みの１つが言語管理理論である（Neustupný 1985、ネウストプニー1995)。言語管理理論では、談話上に現れた問題の記述だけではなく、その問題の発生から管理までを１つのプロセスとしてとらえて分析する。つまり、問題に対し、どのように意識し、なぜその表現を使用し、なぜその言語行動をとったのか、というプロセスをみるものである。そして、このような参加者の問題の管理を、規範からの逸脱、留意、評価、調整計画、調整の実施という言語管理プロセスから分析するものである。

フェアブラザー(2001)は、言語管理理論をインターアクションの管理へも応用するには、言語管理モデルを修正する必要があると主張し、管理モデルの規範と評価の段階の修正案を提案している。その修正案の１つとして「再処理」という段階を設けている。この「再処理」とは、「評価が行われてから、直接、調整計画に至る前」における「べつのプロセス」であるとし、「最初の否定的な評価が弱くなる場合」や「否定的な評価が肯定的評価に変わる場合」が観察されたことを報告している（フェアブラザー2001:62)。本研究では、以上の研究における、評価や再処理の概念を特に参考にする。

NNS が自らの経験について様々な評価や再処理を行い、これをもとにコミュニケーション行動に参加する場合、事実としての経験と、それに対する評価を合わせて述べると考えられる。樺島(1983)は、日本語の文章の構造と構造を作り上げる基本的な要素について分析し、「事実の報告」と「意見・感想」とを区別している。「事実の報告」とは、「出来事や事物を、送り手の主観を入れずに客観的に表現するもの」であり、「事実の報告」によって、読み手や聞き手の感情を呼び起こして、説得する力を持つため、意見や感想を述べる際は、事実の報告と組み合わせて述べるのがよいとしている（樺島 1983:125-127)。

意見や感想に関する発話の研究には、「評価表現」（中井 2003）がある。中井（2003）は、会話参加者同士のインターアクションの中で用いられる「評価表現」の談話上の機能を、話題展開別に分析している。この評価表現を使用することにより、描写内容を豊かにするだけでなく、話題を開始・展開・終了させ、コミュニケーション行動への参加の可能性が広がる

と考えられる。つまり、事実としての自らの経験に、評価表現によって意見や感想を合わせて述べることにより、内容の説得力が増すだけでなく、談話を展開させ、コミュニケーション行動の参加にも変化をもたらすことにつながるものと考えられる。

ただし、「事実の報告」や「意見・感想」において何をどこまでどのように述べるかという問題もある。ネウストプニー（1982、1983）は、コミュニケーションに問題が生じるということが、文法（シンタクス、語彙、発音・文字）だけではなく、文法外のコミュニケーション能力にも原因があると主張している。そして、この文法外のコミュニケーションのルール[(1)]の１つとして、「内容のルール」、つまり、何を伝えるかというルールをあげている。自らの経験とその評価の全てを積極的に言語化して参加を提示しても、必ずしもその場で期待される参加にはならないと考えられる。何を伝え、何を伝えないかという、この内容のルールを考慮して参加を提示する必要があるといえる。

以上を参考に、NNS がインターアクションを経験し、管理を行い、話題としてその自らの経験を、期待や条件の異なるコミュニケーション行動においてどのように描写し、どのように参加を提示するのかを分析する。

3.　データ

3.1　二種のコミュニケーション行動

分析対象は、F（中級後半 NNS、ベトナム語 NS、女性）による、二種のコミュニケーション行動である。1 つは、2003 年に、留学生センターの中級後半のクラスにおいて、スピーチを前提[(2)]として書いた作文である（以下、データ A）。これは、『日本語中級　文型表現練習 2　改訂版』（小口他 2001、以下、教科書）の「第 6 課　新しい経験について意見を述べる」における学習活動の 1 つである。スピーチ用の作文は、来日後のはじめての大きな経験について、経験時と現在の気持ちを対比し、10 行程度にまとめるというタスクである。F は、日本での運転免許取得のための試験について述べている。

もう 1 つは、F が、2004 年 2 月に、2 人の日本語 NS（以下、J1 と J2、ともに同大学学部生、女性）と行った三者会話において、同じ運転免許試験や免許取得後の運転について話している部分である（以下、データ B）。3 人は授業[(3)]を通して知り合った、顔見知り程度の関係である。会話は話題の設定のない 25 分程度の雑談で、全て録音・録画し、後日、3 人個別にフォローアップインタビュー（以下、FUI）を行った。

3.2　二種のコミュニケーション行動の共通点と相違点

データ A と B の関係をみると、F は、まず、授業のタスクとして作文を先に書き、その後、会話で同じ経験を話している。表面的には、データ A は授業活動における書き言葉による参

加であり、データBは顔見知り同士の比較的リラックスした場面での会話による参加という違いがある。さらに、データAは作文の様々な条件があるのに対し、データBは会話の話題の設定のない雑談である。FUIにおいてFは話すことは考えてこなかったと述べており、データAとBには“planned discourse”、“unplanned discourse” (Ochs 1979) という違いがあるといえる。なお、Fが会話で話した経験を、授業の作文でも書いていたということは、会話終了後のFUIから判明した。Fにとっては、作文も会話も、免許取得に関わる一連のインターアクションを話題としたという認識であることがわかる。しかし、実際にデータA、Bを比較すると、同一のインターアクションの経験でありながら、描写のしかたや参加の提示のしかたは大きく異なっていた。

さらに、FUIで、Fは、スピーチ用の作文は、後に担当教員から評価され、授業で教材化されたことも述べた[(4)]。また、データBの会話終了後、3人はそのままFの家に行って会話を続け、さらに会話が盛り上がった、と3人全員から報告があった。どちらのコミュニケーション行動も、他者の肯定的な評価を得ており、コミュニケーション行動として、どちらも成功したことがわかる。各コミュニケーション行動における条件や期待をFが管理し、参加を果たした結果であると考えられる。

以上のことから、データAとBの共通点としては、話題となったインターアクションが同一である点、コミュニケーション行動としては成功した点が指摘できる。相違点としては、コミュニケーション行動の媒体の違い、“planned discourse”、“unplanned discourse”の違い、話題となったインターアクションの描写と参加の提示のしかた、が指摘できる。

以上の二種のデータの共通点と相違点をふまえ、4章では具体的に、Fが免許取得に関わる一連のインターアクションを、種類の異なる二種のコミュニケーション行動において、どのように評価したものとして描写し、参加を提示したのかを分析する。

4. 分析

4.1においてスピーチを前提とした作文における経験の描写と参加について、4.2において雑談における経験の描写と参加について分析する。

4.1 スピーチを前提とした作文における経験の描写と参加

データAのタスクは、来日後はじめての大きな経験について、経験時と現在の気持ちを対比し、10行程度にまとめて書くというコミュニケーション行動で、この指示に従った例が提示されている。このタスクに対し、Fは以下の作文を書いている。

日本へ来て、初めて運転免許試験を受けるという経験をしました。テストがとてもきびしくて、少し間違ったらすぐに落とされました。何回も落とされて、時間もお金もたくさんかかって、本当にうんざりしました。

でも、免許を取って、車に乗ったら、だんだんテストの意味がわかって来て、特に危険があった時にテストのことを思い出して、何回もたすかりました。そして、日本語の勉強もたくさんできました。

私の国は日本と違って、免許をとるのがとてもかんたんですから、交通事故が大変多いです。最初は、日本の免許取得システムはめんどうくさいと思いましたが、今では、むしろ安全でよく整ったシステムであることがわかりました。

F のインターアクションの経験の描写については言語管理理論から、参加については作文で期待された談話の構成と使用表現から分析する。まず、データ A を言語管理理論から分析すると以下のようになる。第 1 段落で日本での運転免許試験に何回も不合格となったことについて、否定的評価を行っている。次に、第 2 段落において、車を運転するという経験が、最初に否定的だった試験に対する評価を考え直すきっかけとなり、「テストの意味がわかってきた」「日本語の勉強になった」という肯定的な評価に変化している。さらに、第 3 段落においては、F の第 1 文化と比較を行い（村岡 2003）、この第 1 文化との相違から、試験に不合格だった時の否定的評価から、「日本の免許取得システムは安全でよく整っている」という肯定的評価に変化したことを述べている。つまり、第一段落における否定的な評価から、第 2、第 3 段落において、運転という経験によって最初の否定的評価が肯定的評価に変化したという、再処理（フェアブラザー2001）の段階があったという流れで描写されているといえる。また、免許取得のシステムという社会的な制度の観点から、客観的に描写されているといえる。

次に、参加について作文で期待された談話の構成と使用表現から分析する。まず、F は、第 6 課での学習項目に従い、このスピーチ原稿の作文を書いたことがわかる。つまり、談話の構成では、タスクの指示に従い、最初の第 1 段落で「新しい経験を紹介する」と「経験したときの気持ちや感想を述べる」について述べ、次の第 2 段落でその後の経験を通して評価が変化したことを述べ、最後の第 3 段落では「比較する・対比する」「新しい経験に対する現在の気持ち・感想を述べる」について述べている。次に、使用表現をみると、第 6 課における学習項目（Ⅰ．経験、Ⅱ．間接受け身、Ⅲ．使役受け身、Ⅳ．逆接、Ⅴ．対比、Ⅵ．副詞）を使用している。つまり、第 1 段落で「日本へ来て、初めて～という経験をしました」と始まり、次の第 2 段落において「でも、～たら、～」とその後の経験と評価を語り、「そして～」と別の評価を加え、第 3 段落では、「今では、～」と、現在の気持ちについて述べている。例と共通する「という経験をしました」だけでなく、逆接の「が」、受け身「落とされました」、

副詞「むしろ」も学習項目である。つまり、日本語の授業で期待された談話の構成や表現を使用することによって、コミュニケーション行動への参加を果たしているといえる。

以上のことから、F は、運転免許取得というインターアクションの経験を、免許取得システムという観点から話題として扱い、最初の否定的評価から、その後の経験を通して再処理を行い、肯定的評価に変化したように描写しているといえる。さらに、タスクで求められた談話の構成、学習項目の表現を利用し、日本語の授業で期待される参加を果たしているといえる。

4.2 雑談における経験の描写と参加

データ B は、F と 2 人の日本人による 25 分程度の三者会話（F、J1、J2）で、F が運転免許試験と免許取得後の運転について話している部分が大きく 2 回出現する。1 つ（データ B-1）は主に免許の試験の経験について、もう 1 つ（データ B-2）は主に免許取得後の運転と教習所の経験について話している。会話の文字化資料は、会話参加が明示的に示せるよう、参加者 3 人の発話を 3 列にわけて記述している。データ B-1、2 の間には、韓国旅行など、運転免許取得とは直接関係ない話題が話されており、データ B-1、2 は連続していない。

まず、データ B-1 における免許試験に関する描写を、言語管理理論と内容のルールの点から分析し、データ A と比較する。データ B-1 における試験に関する F の描写は、免許センターの人が十分な説明をしてくれなかったために、英語で受験可能であることや英語の問題集があることがわからず大変であったことを述べている（326-345、430-455）。データ A では字数制限もあり、何回も試験に落ちたという結果しか述べていないが、データ B では不合格となった原因について、免許センターの人の不親切な言動に言及しながら具体的に述べている。再処理は行われず、経験時の否定的な評価のまま描写されているといえる。

また、J2 から F とは異なる意見が出ても F の評価は変わらず、再処理は行われないことが観察される部分もある。J2 は、351-354 で、免許センターでの対応の悪さに対して F に同意を示し「日本はそういうところは不親切なんですよ　あのー役所市役所↑とかも」と述べている。これに対し F は、「あー最近ですね↑」と J2 の発話に対して同意を示すものの、次に「でも免許センターはー全然違います」と意見の不一致を示している（354-356）。FUI から、実は、F は J2 の「不親切」を「親切」と聞き間違えており、J2 の発話を、免許センターは不親切だが市役所は親切である、という意味で解釈していたことが判明した。誤解が生じていたのは事実だが、逆に、F が他者から異なる意見を聞いても、免許センターの人は不親切であるという強い否定的な評価は変わらず、再処理は行われていないことがわかる。

さらに、接触場面だからこそ生じたと考えられる評価も観察された。F は「特に私は外国

人ー、だからーたぶーん、くれたくない、みたい、ですよね{笑}」(359-361)「特に私は外国人、だから大変だった」(408-409) と、F 自身が外国人であるということを、試験に関する否定的評価の理由として述べている。この「外国人だから」という解釈は、母語場面では生じえない評価であるといえる。

内容のルールからみると、データ A では免許取得システムという観点からの描写であるのに対し、データ B では免許センターの人の対応という観点から描かれている。つまり、同一の経験であるという認識がありながら、2 つのデータでは描写の観点が異なっているといえる。データ A の第 3 段落で述べられた経験時の否定的評価は「日本の免許取得システム」が面倒であるとしている。これに対し、データ B では、「センターの人が説明してくれなかった」と、センターの人の具体的な行為について言及し、「ひどいですよ」(328) と否定的評価を述べている。つまり、データ A は否定的評価を「日本の免許取得システム」という社会的な制度として第三者的に冷静に描写しているのに対し、データ B では、センターの人の具体的な行為の描写を行い、F 自身もその行為に関わった当事者として評価を述べ、経験を描写していると考えられる。

次に、F がどのように会話に参加のしたのかについて分析する。データ A は授業の活動の 1 つであり、作文の構成や使用表現が指定され様々な条件のあるコミュニケーション行動であった。しかし、データ B は特に条件のない自由な参加の保障されたコミュニケーション行動である。よって、データ A、B では、談話の構成や使用表現にも違いが見られる。データ B では、「そ、ほんとでも取ったよかったです」(370-371) と最終的な感想と理解しうる発話があるが、特に作文の談話の構成のように、経験時と現在の気持ちを対比して述べている部分はみられない。また、F の使用表現をみると、第 6 課の学習項目はあまり意識的には使用していないと考えられる。「Ⅰ. 経験」についてみると、F は、「でも、免許は大変だった {笑}」(315) と発話し、学習項目の「という経験をしました」は使用していない。これは、既に 2 人の NS が F の免許取得について知っていたことも影響しているであろう。また、「Ⅱ. 間接受け身」については、免許取得後、他者に車をぶつけられたことについて F は以下の発話を行っている。

「私の車今修理に出してます　この前、ぶつけちゃった」(501-502)

「ほかの人はー、ぶつかっちゃったんですよ」(517-518)

「あ、なんか、自分がーぶつかったけどーなんかちょっと、ゆったから私はちょっと怒った」(541-544)

F は、「ぶつけちゃった」(502) と述べており、「車をぶつける」という行為の主体が明確にされていない。ぶつけられた事実を知っていた J1 は笑って「聞きました」(504) と述べているが、この事実を知らなかった J2 は驚いて「ぶつけちゃった↑」(502) と情報要求をしてい

る。文脈から、いわゆる迷惑の受け身が使用されうるが、ここでは能動文が連続して使用されており、“unplanned discourse” (Ochs 1979) の特徴ではないかと思われる。

さらに、データBの特徴として、主にFとJ1が単独でスピーチのようにfloor (Edelsky1981、Hayashi1991)を取得して、自らの経験を長く話す部分が多いことが指摘できる。よって、floorによって会話を区切り、floorにおいてFが経験を描写しながらどのように参加を提示しているかを分析した。【表1】【表2】は、データBをfloorによって区分し、floorの内容、floor保持者、floor開始者、floor開始発話の談話機能、floor開始発話についてまとめたものである。

【表1】B-1におけるfloor

	発話番号	内　容	保持者	開始者	談話機能	開始発話
1	301-314	免許取得翌日に東京で運転した	F	F	評価表現	私はー全然恐くないんですよ
2	315-371	英語の受験が可能だと教えてくれなかった	F	F	評価表現	でもー免許は大変だった
3	372-407	書類について教えてくれなかった	J1	J1	評価表現	でも、免許センターほんとに説明たりない
4	408-429	他言語受験について教えてくれなかった	F	F	評価表現	特に私は外国人、だから大変だった
5	430-479	他言語問題集について教えてくれなかった	F	F	評価表現	そしてー、すごい、えとー、試験前には、問題集はたくさーん、自分でー家でやるじゃないですか

【表2】B-2におけるfloor

	発話番号	内　容	保持者	開始者	談話機能	発　　話
6	501-560	車がぶつけられた	F	F	情報提供	私の車今修理に出してます この前、ぶつけちゃった
7	561-579	初心者マークをつける期間	J1-J2 (共同)	J2	評価表現	私も初心者だから恐い
8	580-627	つくばの運転は歩行者がいないから簡単	F	F	評価表現	うーん、でもーはじーめてつくばでうんてーんしたらー簡単ー、ですね↑
9	628-638	まだスピードを出さずに走っている	J2	J2	評価表現	私まだ教習所で 40 キロとかしか走ったことがない
10	639-662	教習所ではよく怒られた	J1	J1	評価表現	ぴったりにあわせてそのまま、それをー60 キロのままいくっての大変じゃない
11	663-677	実技は大丈夫だったが、学科試験は大変だった	F	F	評価表現	私は、えと、うんてーん試験は 1 回も、落ちなかったけど、学科試験は、ちょっとー難しい大変だった

【表 1】【表 2】から、会話参加について以下のことがわかる。まず、floor の開始に注目すると、F が単独で floor 保有者となった場合（floor1、2、4、5、6、8、11）、F が評価表現（中井 2003）で floor を開始していることがわかる。これは、F がこれから話す内容に対する自らの評価を最初に述べることによって話の流れの方向付けをし、聞き手の J1、J2 をこれから話す内容に引き込み、単独で floor を獲得したものと考えられる。

会話資料をみると、F は、floor 中、他の参加者との共通点を見つけ、評価表現によって共感を示している。例えば、floor3 において、J1 も免許センターの人が十分な説明をしてくれなかった経験について語ると、F は「そうですね、何もー説明してくれないんですよー」（388-390）と共感を示している。また、floor10 においても、J1 の教習所の先生が怖いという内容に対して、「そうですねー先生はー」（652）、「{そうそうそう}」（656）と笑いながら同意を示し、「なんかいつもー緊張」（657）と言い換えて共感を示している。

以上から、F は、経験時の評価から再処理は行わず、否定的な評価のまま自らの経験について描写していることがわかる。しかし、413-416 の「全部日本語、しかもなんかはっきりーゆわなかったからーもう、困っ｛た｝」や、457-466 における J1 との「センターの人と喧嘩した」という内容を、笑いながら発話している。また、最後に「私は、えと、うんてーん試験は 1 回も、落ちなかったけど、学｛科試験は｝、ちょっとー難しい 大変だった」（663-667）と再び学科試験の難しさについて言及しているが、「学 ｛科試験は｝」と笑いながら発話している。笑いながらの発話に加え、全体として 3 人は笑顔で会話を展開しており、経験時の否定的評価は緩んでいるものと考えられる。フェアブラザー（2001）は、インターアクション時の強い否定的評価が、FUI 時には、既に再処理が行われていたため、一時的な評価がなくなって非評価化された例を報告している。F の否定的な評価も、この会話の時点では、笑って話せるようになっていたものと考えられ、結果として、描写内容の深刻さが緩和されていると考えられる。さらに、評価表現を巧みに使用し、floor を開始させることにより、積極的な会話参加を果たしているといえる。

以上、データ A、B の分析から、二種のコミュニケーション行動は、同一のインターアクションの経験を話題としているが、描写の観点と評価、談話の構成、使用表現の点で異なり、この結果提示された参加も異なることが指摘できる。

5．考察

データ A､B における F のインターアクションの描写と参加の分析をまとめると以下のようになる。まず、コミュニケーション行動への参加についてであるが、データ A では、授業の条件や期待にそった談話の構成と表現を使用してコミュニケーション行動を行ったといえる。

これに対しデータ B では、教室活動で練習した構成や表現はあまり使用していないが、経験したインターアクションの流れにそってかなり詳しい情報を描写し、評価表現を巧みに使用して floor を開始し、会話参加者の同意や共感を得ながら参加を果たしていたといえる。また、データ A では、否定的評価が再処理によって肯定的評価に変化したように描写されている。これに対し、データ B では、経験時の否定的な評価のままであり、反対の意見があっても自身の否定的評価は変化しないものであった。ただし、経験時の否定的評価は緩和されており、また、接触場面だからこそみられたと考えられる評価も述べられていた。

ネウストプニー（1982）は、内容のルールに関連し、外国語で多量の情報を伝えるのは非常に困難であるとしている。確かに、外国語によるコミュニケーション行動では、言いたいことが言えないという問題の方が多いであろうが、逆に何を伝えないかということも重要であると考えられる。F の場合、データ B から、自分の言いたいことをかなり相手に効果的に伝えることができる談話能力を持っていると考えられる。しかし、データ A のように、描写の観点を変え、そこで求められている談話の構成や表現を使用してコミュニケーション行動を行うこともできていた。F は、その場のコミュニケーション行動における条件や期待を考慮して参加を調整し、インターアクションの描写の観点や評価を変えて描き出す管理もできているといえる。このことから、会話教育の現場では、ネウストプニー（1982）の内容のルールの意識化と参加の調整を扱うことが考えられる。これは、日本語の規範に従わせて、話題の描写や参加の提示のしかたを強制するものではない。内容のルールについて NNS 自身が考えた上で、コミュニケーション行動の様々な条件や期待を考慮し、NNS が自分で選択して、コミュニケーション行動に参加することを、教育活動において意識化することを主張するものである。例えば、教室活動としては、データ A、B のような種類の異なるコミュニケーション行動をビデオなどにより授業で提示し、インターアクションの描写のしかたの違い、その違いによる受け手の印象などを、ディスカッションすることが考えられる。その上で、実際に、ビジターセッション用、研究室の人との雑談用、スピーチ用など、様々なコミュニケーション行動を設定し、学習者自身がどのようにインターアクションを描写し、参加を提示するか考える活動が考えられる。実際に、異なるコミュニケーション行動の直前などに行えば、実践的であると考える。さらに、作文と会話というように、コミュニケーション行動をその媒体によって単純に区別するのではなく、作文教育と会話教育が連携を持ちつつ教室活動を行う可能性もあると考えられる。

6．まとめと今後の課題

本研究では、ある 1 つのインターアクションの経験を話題とし、種類の異なる 2 つのコミュニケーション行動において、NNS がいかに自らの経験を描写し、参加を提示したかを分析した。F がコミュニケーション行動の種類によって、経験の描写の観点や評価を変え、そこで

期待される描写と参加を行っていることを述べた。これをもとに、積極的な会話参加だけでなく、自らの参加するコミュニケーション行動の期待や条件を考慮して、描写や参加のしかたを変化させることの意識化を会話教育で扱うことを考察した。

今後は、NNS の経験する接触場面のインターアクションに関する研究を参考に、評価の段階だけでなく他の管理のプロセスについても、コミュニケーション行動の参加に生かせるよう分析することが考えられる。インターアクションとコミュニケーション行動の二方向からの分析を合わせて行うことにより、NNS の接触場面におけるインターアクションの管理のプロセスを明らかにし、教育への応用へつなげていきたいと考える。

さらに、Neustupný（1996）、 Fairbrother（2000）では、接触場面における肯定的評価についても分析する必要性を主張している。大場・中井･土井（2005）でも、NNS 同士の談話技能を巧みに使用した会話分析から、会話教育への応用を提案した。接触場面の分析では、問題の発生とその解決の過程を扱う研究が多いが、今回の分析のように、コミュニケーション行動として成功した例を積極的に分析し、日本語教育への応用を考察する可能性もあると筆者は考える。

注

(1) ネウストプニー（1982、1983）の文法外のルールは以下の通りである。1.点火ルール（どのような場合にコミュニケーションを始めるか）、2.セッティング・ルール（いつ、どこでコミュニケーションを行うか）、3.参加者ルール（だれとコミュニケーションをするか）、4.バラエティー・ルール（どの言語、方言、スタイルなどを使うか）、5.内容のルール（何を伝えるか）、6.形のルール（メッセージをどう形づけるか）、7.媒体のルール（メッセージを送るとき、どのようなチャンネルを使うか）、8.操作のルール（コミュニケーションに対してどのような行動をとるか）､9.運用のルール(メッセージをどのように具体化するか)。

(2) 担当教員に確認したところ、後に行ったスピーチは別の内容であった。

(3) F はデータ A のクラスの前の学期に、中級前半のクラスに出席していた。この中級前半のクラスに､データ B の会話に参加した 2 人の NS が会話練習のボランティアとしてクラスに参加していた。なお、ともにティームティーチングであり、筆者はこの中級前半のクラスの担当教員の 1 人であった。よって、中級後半のクラスで行われたデータ A の作文のための授業活動に筆者は関与していない。

(4) 担当教員に確認したところ、「「経験談」の実例とした」とのことであった。

参考文献

大場美和子・中井陽子・土井眞美（2005）「会話への積極的参加の指導に向けて－第三者言語接触場面における上級学習者の談話技能と会話のスタイルの分析から－」『日本語教育方法研究会 10 周年記念論文集』日本語教育方法研究会：17-24

小口淑枝・金久保紀子・加納千恵子・衣川隆生・戸田貴子・長能宏子（2001）『日本語中級 文型表現練習 2 改訂版』筑波大学留学生センター

樺島忠夫（1983）「4.文章構造」水谷静夫編集『朝倉日本語新講座 5 運用Ⅰ』朝倉書店：118-141

中井陽子（2003）「話題開始部・中間部・終了部で用いられる評価表現」『日本語教育学会秋季予稿集』日本語教育学会：233-235

_____・大場美和子・土井眞美 （2004）「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案－談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」『世界の日本語教育』14 国際交流基金日本語国際センター：75-91

ネウストプニー, J.V. （1981）「外国人の日本語の実態(1)外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45 日本語教育学会：30-40

_____（1982）『外国人とのコミュニケーション』岩波書店

_____（1983）「日本語教育と二重文化教育」『日本語教育』49 日本語教育学会：13-24

_____（1995）「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部日本学科（言語系）：67-82

フェアブラザー, L.（2001）「言語管理モデルからインターアクション管理モデルへ」村岡英裕編『接触場面における言語管理プロセスについて（Ⅰ）』千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 37: 55-65

村岡英裕（2003）「社会文化能力はどのように習得されるか」『日本語準母語話者のコミュニケーション規範に関する調査研究』平成 12～14 年度科学研究費補助金（基盤研究（c）（2））研究成果報告書: 7-49

Edelsky, C.（1981）“ Who’s Got the Floor?” *Language in Society* 10: 383-421

Fairbrother, L. C.（2000）Analysis of Interaction Management within a Party Situation. 『社会言語科学』2:2: 社会言語科学会 33-42

Hayashi, R.（1991） Floor Structure of English and Japanese Conversation. *Journal of Pragmatics* 16 : 1-30

Neustupný, J. V.（1985）Problems in Australian-Japanese Contact Situations. Pride, J. (ed.), *Cross-Cultural Encounters: Communication and Mis-communication*, Melbourne: River Sene Publications: 44-64

_____（1996）Current Issues in Japanese-Foreign Contact Situations. International

Research Centre for Japanese Studies (ed.), Kyoto Conference on Japanese Studies 1994, 2: 208-216

Ochs, E.（1979）Planned and Unplanned Discourse. Givon, T. (ed.), *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*. New York: Academic Press:　51-80

文字化の規則

[　]	同時発話
[[　]]	同時発話のうち、重ねた方の発話
/ /	ターンを取得しない発話
/	ターンを取得しない発話が発話された位置
{笑}	笑い
{　}	笑いながらの発話
↑	上昇イントネーション
XXX	聞き取り不能部分
数字	沈黙の秒数
、	ごく短いポーズ

会話資料
データB-1

	J1	J2	F
301		[恐いなー]	[私はー]全然恐くないんですよ
302		えー	
303			はい免許とってからすぐ、
304		/うん/	えとー、次の日はー/
305			ここから、東京に運転
306		[えー]	[したんですよ][笑]
307	それはすごい[笑]/		/そ/
308	[東京は]恐いよ	[えー]	
309		[ねー]	[[笑]]
310		[東京恐いよ]	[そうですね]車ー
311		/うん/	たくさん止まって/いるから
312			なんか、でも、すぐ、次の日は、
313		[いやあー]こわーい	車に乗って[東京に[行ったん]
314			ですよ}
315	[私]		[でもー]免許は大変だった{笑}
316		大変でした/んだよねー	/そう/
317		日本語で受けたんです	
318		[よね↑]	[[そう]]日本語ー
319			最初は日本語で受けてー
320			なんか[笑]難しくて時間が
321		/あー/	たんなかったですよ/
322	/うーん/		だから、/もう最後は、
323			英語ーで、受けた
324	/あ/	あ英語/でもできたんですか↑	
325	[英語も]あるの↑		[はい]
326			最初わかんなかったですよ
327			あそこの免許センター
328	/[うーん]/	/[うーん]/	みんなほんとにひどいですよ/
329	/[あー]/	/[うーん]/	何も説明くれなかった/
330			だからもう英語だけしか、
331		うーん	ないと思って/だから、
332			え、あ、あー日本語ー
333	だけしか/ないと		/はい/
334	/うんうん/		と思ってー/、でも本当は
335			スペイン語とかー、
336	[[えー↑]]	[[えー]]	中国語もー[できますよ]
337		[そうなんだー]	[はい]
338			私は何回も怒ったからー
339			あ、えとーあなたは
340			英語でもできるーんですよ
341		/うーん/	自分で調べた/、あ、え
342			英語もできるから、あそこの
343			免許センタと、喧嘩した
344	[えー]		[なんで]何にも説明ー
345			くれなかったんですね
346	うーん		
347			うーんそうそう
348	だめだねー		
349		[不]親切だなー	[そう]
350	[うーん]		[そう]
351		[日本はそういう]ところは	[ほんとに不親切]
352	/うーん/	不親切なんですよ/	
353	[うーん]	あのー役所[市役所]↑	
354		[とかも]	[[あー]]最近ですね↑
355	[[うーん]]		[でも]免許センターはー
356			全然違います
357	うーん		
358			そう
359			特に私は外国人ー、だからー
360			たぶーん、くれたくない、
361			みたい、ですよね[笑]
362	[あー]	[えー]	
363			んーそう
364			だからなんか
365	めんどくさいと思ってー/	/うーん/	/そう/
366	[あまり]		[喧嘩]した
367	[親切]にしてくれない		{笑}
368	/んー/	そーねー/	
369	/ねー/	よくないところです/	
370			そ、ほんとでも取った
371			よかったです
372	[[でも、免許センター]]ほんと	[うんよかった]	
373	説明足りない、私も1回		
374	なんか試験を受けてー/	/うん/	
375	でも、なんだろ、		
376	1	1	1
377	試験を受けて受かって		
378	そのあと、なんかーまたー		
379	しにいかなきゃいけない		
380	書類を出すとかー/なにか	/ふーん/	
381	しにいか、なきゃいけなかった		
382	んだけど、その期かーん、		
383	が決まっていてー/	/うん/	
384	でも私はそれを知らなくて/	/うん/	
385	その期間過ぎ{ちゃった		
386		過ぎちゃった	
387	{笑}		{笑}
388			そうですね、何もー
389	[[そう教えてくれない		[説明してくれないんです
390	から―]]/		よー]/そう/
391		え過ぎちゃってどうしたんですか	
392	過ぎちゃったけどーでも		
393	文句をいってー/	/[うん]/	
394	だってその時教えてくれ		
395	なかったじゃないですかー/	/うん/	
396	とかって、なん、何日まで		
397	っていうの		
398		うんうん	
399	だからー過ぎちゃったの		
400	わからなかったのにーとか		
401	ゆって、{ほいで}		
402		で、OKだったんですか	
403	うん、でなんか、文句いってー		
404	ちょっと{上の人に[連絡]して}	[[笑]]	
405	[そしたらー]特例、特例		[そうですねー]
406	っていうのか、[認めて]、	[んー]	
407	くれ、てたけど/	/んー/	
408			特に私は外国人、だから
409			大変だった
410			全部、あそこ免許センター
411			みんな英語できないん、
412		/うーん/	じゃないですか/
413		/そうそう/	全部日本語/、しかもなんか
414			はっきりーゆわなかった
415			から―もう、困った}
416	[[うーん]]	[[うーん]]	[もう]ほんとに
417	1	1	1
418			どこでも書いてなかった

419	[うーん]		英語はできる、と、[どこでも]
420		[うーん]	書いてなかった[です]よ
421	/うん/	私知らなかったですね/	
422		日本語しかだめだと思ってた	
423	[私も]	[うーん]	
424	だめだ/と思ってたー	/ねー/	
425	ある		
426		あるんだー	
427			はいスペイン語とかもできます
428	[あー]	[あー]	
429			そう
430			そしてー、すごい、えとー、
431			試験前には、問題集は
432			たくさーん、自分で一家で
433	/うーん/		やるじゃないです/か
434			あそれも一、問題集も英語も
435			あるけどー私は免許センター
436			で聞いた、んですけど、
437			あ全然ないですよ、本とか
438			問題集、英語ではないです
439			テストはあるけどー
440			でも、私は、もう一回、
441			ほかーの場所で調べて
442	/んー/		あったんですよ/
443			しかも、免許センターの
444			前にの、あるビルは中ー
445	あーお店が[あった]んだ	[[あー]]	
446			あお店じゃなくてー、なんか、
447			免許センターと関係ある
448			でも、あーのーセンターはね
449			なんか、んー外国人のために
450			免許取るためみたいです
451	/あー/		よね↑/免許センターの前に、
452	ある		
453			ある、あるのに、でも、
454			免許センターの人は、
455			あ、全然ないですよ、ゆったん
456	ふーん、だめだねー	へー	
457			そうですねすごい怒った
458	[うん]		[喧嘩]、2-3回くらい
459			喧嘩した{笑}
460	{笑}	{笑}	
461			そうそうそう{笑}
462	私もけんかした{笑}		
463			そうですね↑
464	うーんだめだよね		
465			しますよね↑
466	うーん		
467		なんでこんなに	
468		不親切なんでしょうねー	
469	ねー		
470		/んー/	そうですねだって/
471			1回行ったら大へーんだもん
472		んー	
473	[遠いしー]		[お金]
474	/かかるし/		そうお金もかかるし/
475			時間もー
476		うーん	
477	うん		
478			すごかっ{た}
479	うーん		

データB-2

	J1	J2	F
501			私の車今修理に出してます
502		[[ぶつけちゃった↑]]	この前、ぶつけ[ちゃった]
503			はい
504	聞きました{笑}		
505		そうなんだ↑	
506			{笑}
507			痛かった{笑}
508		痛かった↑けがは大丈夫↑	
509			いーえ、車、{けー}えとー
510		/んー/	か、え、傷がついてて/
511			心が痛い{んですよ}
512	{笑}	{笑}	{笑}
513		心が痛いんだ	
514	私も傷がいっぱいついてる		
515	しかも自分の駐車場[{笑}]	[{笑}]	[{笑}]
516	全部		
517			ほかの人は一、
518			ぶつかっちゃたんですよ
519		ほかの人がぶつかっちゃった↑	
520			そう
521		あー	
522			同じーXXX
523	{笑}	{笑}	{笑}
524		大変だー	
525			そうですねー
526	1	1	1
527			私の夫はーなんか、
528			あーもういいかなー
529			ってゆったけど、私は
530			だめ{笑}
531			そうですね↑
532			でも私はもういいかな↑
533			って感じで{笑}
534	私はほっといてる、よ、ご、		
535	5カ所ぐらい傷がついてる		
536	[XXX]		[んー]
537			でもーしかも、彼の奥さんは
538			ちょっと、なんか{笑}
539	ん、奥さん↑お母さん↑		
540			ううん奥さん
541			あ、なんか、自分がー
542			ぶつかったけどーなんか
543			ちょっと、ゆったから
544			私はちょっと怒った
545	あー/		/んー/
546	あーその相手の、/人↑		/そうそうそう/
547	あー		
548		あー	
549			だから、絶対
550	1	1	1
551			もらう
552	{笑}		{笑}
553	あー大変だ		
554	1	1	1
555			そうですよね↑
556			{笑}
557	2	2	2
558	{笑}	{笑}	{笑}

559	気をつけないと		
560			そうですね
561		私も初心者だから恐い	
562	ね一		
563		ほんとに恐い	
564	初心者マークつけちゃえば↑		
565		もういっぱいつけますよ	
566	[笑]	[笑]	[笑]
567	初心者、でも期間、は一		
568	違うよね↑なんか/	/ん↑/	
569	あれって一免許		
570	/とってから一/	免許とってから一/	
571	/1年間/	1年間/だから一	
572		私は乗ってから1年間に	
573		しますよ	
574	[それでいいと思う]		[そうですねー]
575	でも、なんか、茨城とか、		
576	逆に一、意地悪[されたりして]		
577		え一	
578		後ろに、つけたりとか	
579		ぴたっと[笑]	
580			う一ん、でも一はじ一めて
581			つくばでうんて一んしたら一
582			簡単一、ですね↑
583		そうですか↑	
584			そうそうなんか、
585			ほ一うこうしゃ一いないから一
586	[あ一]	[ん↑]	
587		/あ歩行者がいない/	歩いて一/いる人いないから
588			そうすごい簡単です
589			スピードは一、だけ、は
590	[あ一]		問題、[みんな速い]
591		[あ一]東大通は速い	[そうそう]
592			そう80キロとか
593		みんなとばす	
594	[道が]広いからね		[私]
595		ね一	
596	[まっすぐ]だから		[私も]
597		まっすぐだから	
598	ぐい一っといきたくなる/		/そうそう/
599		[いきたくなる]	[ちょっとけ一さつ一]
600		いきたくなるんですか↑	
601	いえ一そんなことないんです		
602			警察がちょっと怖いだけ
603	[笑]	[笑]	[笑]
604			私もはっキロは出しますよ
605			[笑]
606		100キロも↑	
607			そう
608	え一		
609			そうそう
610	危ない		
611			100キロ
612	[それは]		
613			[危ないですよね↑]
614			80キロは普通一かな↑[笑]
615	普通↑		
616		普通[笑]	
617			そうそう、みんな速いんですよ
618			自分が遅いだけはなんか
619			もう危ないんですね

620		ん一そうですね	
621	あ一そう、あ一それは		
622	ありますよね		
623			そう
624	流れにのらないと		
625			そう
626	[XXX]	[こわーい]	
627	ね一ちょっと		
628		私まだ教習所で40キロ	
629		とかしか走ったことがない	
630		でも、道路で、60キロ	
631		出、すけど一あんまり出さない	
632		あの一教習中は一、しっかり	
633		守らなければならないですね↑	
634		制限速度	
635	[うーん]		[うーん]
636		う一ん	
637		だから60キロぴったりで[笑]/	/[笑]/
638		走って	
639	ぴったりにあわせて		
640	そのまま、それを一		
641	60一キロのままいく		
642	っての大変[じゃない]	[[大変ですよね↑]]	
643			そうですね一
644		なんかーん一	
645	いつもなんか、こう、過ぎて		
646		だんだん一	
647	[[60キロー]]ちょっと一/	[増えていくんですよね]	/そうそう/
648	あがったり/、して、難しい	/んー/	
649		難しいですー	
650	私も教習所で、何度も先生に		
651	怒られた、怒られたことが		
652			そうですね先生は一
653	もうちょっとあげてください		
654	っていわれてぐい一って		
655	あげたらあがりすぎです		
656	[[笑]]	[[笑]]	[[そうそうそう]]
657	[怒られ]		なんか[いつも一]緊張一
658	そうしますよね/	/そう/	
659		このままかたまって、	
660		動けない、んですよ	
661		うわ一って	
662		うーん	
663			私は、えと、うんて一ん
664			試験は1回も、落ちなかった
665	/あ一/	/あ一/	けど、学[科試験/は、]
666			ちょっと一難しい
667			大変だった
668		私も難しかった	
669			なが一いですね一
670	うん↑		
671			えと一問題集は
672	う一ん		
673		たくさんある	
674			[笑]
675			大変だった
676			難しい
677			[笑]